まえがき

徳島大学総合科学部人間社会学科・社会学研究室
助教授　樫田美雄（HCB00537@nifty.ne.jp）

平成 11 年度に樫田が主宰したゼミナールは、３年次生と卒論生を分けて扱う形式で運営された。すなわち、３年次生の１０人は社会調査実習と一体化した演習を火曜日の午後に行い、卒論生の５人は、演習を隔週木曜日の午前に行った[*1]。本抄録集は、この卒論生５名が徳島大学総合科学部に提出した卒業論文の各人による抄録を集めたものである。

内容的には、市原が家族社会学と近代化論の交差領域、他の４人がエスノメソドロジー（あるいは相互行為分析）関連領域で議論を展開している。さらにこの４名のうち２名（岡田、阿波）は、福祉関連の場面分析としてくくることができ、また、３名（阿波、早崎、根矢）は「性」現象をテーマにしているとくくることができるので、目次のような編集をすることとなった。以下、目次順に各論文の目玉部分の紹介をすることでまえがきとする。

第一論文「家屋の近代化と家族の近代化」（市原初美）は、まず、住まい方の相互作用水準での分析の必要性を主張し、寝食分離を典型とした、部屋の機能別配置が日本で充分行われていないからといって我が国の家屋の近代化が不十分であるとはいえないことを主張する。この部分の議論には社会学的な思考のきらめきがあり評価できよう。さらに、現代家族に目を向けるならば、そもそも近代家族的な「公－私区分」とは違う形での人間関係の再編成が進んでいること（家族の個人化）を指摘し、この点を家屋の利用に関しても考えていかなければならないと主張している。「家族についての社会学」に矮小化されがちな「家族社会学」研究の流れの中で、社会全体の変動を視野に入れた、構えの大きい研究スタイル（「家族をとおしてみた社会学」）を取っていることは高く評価できよう。

第二論文「在宅看護における相互行為分析」（岡田叔子）は、エスノメソドロジーにおける「DPI（Doctor-Patient-Interaction）研究」の流れを受けて、「専門職」と「クライエント」の相互行為場面があるときに、それを「専門職」の一方的誘導の場面として分析する必要はない、という立場からの研究を行っている。『介護保険』導入の年である 2000 年に書かれたタイムリーな論文であるというだけでなく、「訪問看護」という場面の作られ方を精密に分析した水準の高い論文であるとも評価できよう。また、エスノメソドロジー系の論文には珍しく説明が丁寧でわかりやすいことは特別に評価してよいように思われる。

第三論文「介護の世界における性の位置」（阿波三奈加）も、第二論文同様にタイムリーな話題を取り上げている。「人権としての性」という考え方の浸透・普及によって、いまや、老人介護の世界においても、「老人の性の尊重」は重要なことと考えられるにいたっている。けれども阿波は、その議論の危うさを理論的・実践的につく。すなわち、「誰もが性を尊重される」ことは、「性への解放」であるかも知れないが、「性からの解放」ではない可能性があること、そして、医師が社会的合意として身体を非・性的に扱うテク

---

*1 徳島大学総合科学部人間社会学科・国際社会文化研究コース・現代国際社会分野の卒業予定者は、卒論ゼミに参加するほか、「卒論テーマ発表会」（５月）、「卒論中間発表会」（11 月）、「卒論合同発表会（地域総合分野との合同発表会）」（２月）の３回の公開発表会で発表をすることが義務づけられている。なお、今回抄録集に掲載された卒業論文の本体は、行動科学図書室（徳島大学総合科学部１号館南棟２階）に保管され、閲覧が可能になっている。

ニックを行使し得ているように、介護の場面でも、身体を非・性的に扱うテクニックが開発されないならば、施設内で混乱が生じる可能性があることを指摘している。現実の「人権重視言説」を相対化し得ている点で、社会学的に施設や福祉というものを考える際の思考のもっとも良質な例であると評価できよう。

第四論文「同性愛者のカテゴリー化実践」（早崎一修）も、性の問題を相互行為の問題として扱っている。学部の卒業論文には珍しく「先行研究批判（ポジティブ・レイベリング論批判）」がしっかりしており、アカデミックな志向を持っている点でも際だっている。二年続けて同じテーマを考えれば学部生であってもこの水準にまで達するのだというお手本のような論文であるといえよう。議論の骨格（同性愛者カテゴリーの根拠に生物学的本質を置くのではなく、相互行為的編成から、同性愛者カテゴリーの達成をこそ、研究すべきだ）は、本人もいうように「言語論的転回」以降の人文科学・社会科学の水準を踏まえており、具体的な分析も読者を納得させる水準になっているといえよう。

第五論文「おかまバーにおける相互行為分析」（根矢三千代）は、書かれた文章中に散見される幼ない表現に引きづられて、ついつい低評価を下してしまいかねない論文であるが、この論文に示された研究の全体像は筋道だった思考に支えられた構造のしっかりしたものであり、高く評価されるべきものであろう。立ち上がり部分の「低い声」が「高い声」と対比されて用いられることで、「おかま」という存在が可能になっている、という分析なども鮮やかだが、結論部分の議論（接客空間での相互行為に有用な一般的なコミュニケーション上の資源＝欲望の表明を容易にする素材、等＝として“おかまであること”は用いられている）はさらに重要である。タイトルから想像されるのとは違って、「きわもの」度の低い、相互行為分析として本筋の研究であるということができよう。

なお、論文作成に用いたデータ（ビデオテープや原トランスクリプト）については、現在私の研究室に保存する方向で交渉・準備中であることを最後に付け加えておこう。データのうち貴重なもの（たとえば、岡田の介護場面の録音データなど）については、機会をみてＣＤＲＯＭ化（あるいはホームページ掲載）を試みる予定もある。研究者の２次利用についても検討しているので、関心のある向きは問い合わせて欲しい。